
『太陽』

緑川 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『太陽』

【Nコード】

N0535S

【作者名】

緑川 玲

【あらすじ】

7年前に分かれた兄妹が第3魔法術学院で再会する時、**真実を告げる歯車**が回り始める・・・？これは楽しい学園生活から世界の闇の活動までを過ごす少年少女の物語。これは太陽の改稿版になります。

用語解説（前書き）

前に書いていた 太陽 を間違つて消してしまいました。また、1からのスタートになりますが宜しくお願ひします。また色々と変えているので、楽しんでいただけたら幸いです。これは、読まなくても大丈夫です。

用語解説

魔法師 公式（魔法執行魔術公式）を使わずに魔法を使える人間。体内で普通の人間、一般人よりも多い魔力を持つ人間で魔術具を使わないもの。魔法執行時には自然に魔法陣が出る。訓練次第では、魔法陣を出さないことも可能（血の滲むような訓練が必要）。

魔術師 公式を使い魔法（魔術）を使う人間。魔法師よりも魔力が少なく魔術具が無いと魔法が使えない。また、魔法陣が出ないため魔術具に代用させる等する。

魔力師 魔術師よりも更に魔力が少ない人間を指す。主に一般人と呼ばれ、魔力結晶や魔術具を使っても魔法を執行できないものを指す（マジックアイテムなどの魔力が込められているものを除く）。

魔導師 優秀な魔術師、魔法師に与えられる称号。様々な特権がある。

魔術具、魔法具 主に魔術師が使う物。様々な武器やアクセサリーの形をしている。

封魔具 リミッターのこと。アクセサリーが多い。

マジックアイテム 一般に売られている魔法を込められた物。例えば、ボールをぶつけると光を発する、カードに書かれた言葉と言うと介護用の人形ドールが出てくるなど。一定時間経つ（魔力が無くなると）と消滅する。これは、物自体に魔力が込められているため魔力師（一般人）でも使える。種類によって値段も様々である。

陽光 この世界の警察。学生も対象としており、学生隊員には特殊権限（いざという時に学校を休んだり、関係の捜査資料を見れたり、魔法術の使用が認められているなど）がある。

五姫 巫女姫のことで火、水、風、土、雷の神に祈りが捧げ、仕える人間のこと。巫女姫になるには巫女の刻印しるしが必要で巫女姫にならないという選択肢は無い。この世界で平和の象徴のような存在で神聖視されている。

監査委員会 五姫や守護者達が『正しいこと』をしているかを見る。10人の魔導師で活動している。また、事件の揉み消しなども担当している。

刻印 一部の人間の体のどこかにある。その印によって未来が決まることもある（巫女姫など）。色、形も様々（例、バーコードの様なモノから数字、龍の絵のようなモノまで存在する）である。

守護者 巫女姫に付き1人居る。また、守護者直属部隊（巫女姫直属部隊とも言つ）の部隊がある。守護者は巫女姫自身が選べる（力が規定値を超える、その他の能力も規定値以上であることが条件）。

巫女姫直属部隊 巫女姫を守るための部隊で守護者、巫女姫の命令でしか動かない。組織名（蒼の巫女姫は蒼流、紅の巫女姫は紅蓮、翠の巫女姫は神風、橙の巫女姫は雷光、鳶の巫女姫は地天）で呼ばれる。

敬家 由緒正しい魔法の一族。巫女姫、守護者ほどでは無いが様々な権限を持つ。

魔獣 上級のモノで言うとドラゴンなど。また、魔獣を使い魔にす

登場人物紹介（前書き）

読まなくても大丈夫です。ネタバレを含む

登場人物紹介

学院

天宮あまみや 夕陽ゆづひ：魔法師 15歳

本作の主人公。今は滅んだ敬家の1つ、天宮家の生き残りで魔術具として首から提げている指輪は天宮家の人間の証で双子の妹の朝陽（後述）と子供の頃に交換したため、朱雀の絵が刻まれている。本来は金髪碧眼だが日常では>変化<の魔法を掛けて黒髪、緑の瞳にしている。

国の裏の組織、陽影ようえいでは氷水ひすいと呼ばれている。5属性全ての魔法を使えるが、水（主に氷）魔法が得意で良く使っている。学院では風魔法を専攻している。五姫いつひめの1人である蒼姫そうきの守護者で話し相手でもある。その気になれば、街一つを数分で凍らせることができる。普段は蒼姫からもらった、蒼井あおい響ひびきという名前で過ごしている。1年A組所属。一応、魔術師となっている（本当は魔法師）。実は病弱で喘息持ちであるがいつもは、蒼姫からもらった治癒結晶ヒールの腕輪で耐性を高めている。

園宮そのみや 朝陽あさひ：魔法師 15歳

夕陽の双子の妹。現在は敬家の1つである園宮家に保護されている。7年前のショックで記憶を失った為、夕陽たちのことは覚えていない。本当の属性は火と土だが、同じく7年前のショックで火の魔力を失ったが夕陽から『気』を分けてもらい、土と水属性の魔法を使えるようになった。晴菜とは義理の従姉妹で仲が良く、いつも一緒にいる。2属性扱えることから学院内でも優秀とされている。その

昔、夕陽と交換したため指輪は青龍が刻まれておりお守りとして大切にしている。

桜院 おついでん 晴菜 はるな：魔法師 15歳

朝陽の義理の従姉妹で親友。火属性の魔法を使う魔法師で天才と呼ばれている。気が強く、敬家 けいけとしての誇りが強い。赤い髪に桜色の瞳をしている。

塚本 つかもと 大地 だいち：魔法師 16歳

土属性の魔法師で魔力は潜在的にも高いのだが上手くコントロール出来ていない為、探査系や感知系は苦手。体力馬鹿で体術は得意なのが筆記が最悪なため、1年A組に所属している。大雑把な性格細かいことが苦手。夕陽の親友（自称）で千夏の幼馴染。また、千夏には頭が上がらない。

三嶋 みしま 千夏 ちなつ：魔法師 16歳

大地の幼馴染で朝陽と晴菜とも仲が良い。明るく元気で警察官を目指しているため、規則に厳しい。また、父親が警察官で自身も陽光 ようこう（警察）に所属している。水属性の魔法を使う魔法師。魔術具はペンダント。1年A組に所属している。

杉宮 すぎみや 潤 じゆん：魔法師 15歳

夕陽の従兄弟にして相棒で同じく生き残り。彼も学院では魔術師として振舞っている。風属性の魔法を得意とする。穏やかで優しい性格だが、肝心なことは言わない。夕陽と同じく、守護者で翠姫すいきに仕えているが仕えている巫女姫が違うので一応派閥は別。魔術具（本当は魔法具）として天宮一族の指輪を使用している。白虎の絵が刻まれている。

篠原しのはら 小冬こふゆ：魔術師 25歳

1年A組の担任。夕陽の雰囲気から友達ができないのではないかと気にしている。基本良い人で、生徒に危険なことさせる（魔法の実技テストで魔獣と戦わせる）などを嫌がりついて行きたがる。過保護。

キジ・ユーキャン：魔法師 27歳

1年S組の担任教師。魔法師としては優秀だが、実力がないもの（S組以外の生徒）を使い捨てや落ちこぼれ、無能などと呼ぶため嫌われている。また、すごく嫌味つたらしい。夕陽を生意気と思っており、何かあるたびに絡んでくる。火の魔法師。

デュノア・クレルベート 58歳

第3魔法術学院の理事長である。夕陽の事情を知っている。実は五姫<イツヒメ>（巫女姫の組織）の中の監査委員会の1員（10人しかない）。世界有数の雷の魔法師。

五姫・・・この世界の平和の象徴のような神聖とされている人間。それぞれの属性（火、水、風、雷、土）の神に仕えている。髪や瞳は製機で属性の色になっている。

蒼の巫女姫（蒼姫、水姫） 13歳

姫の位を持つ者。夕陽が仕えている人物で命の恩人。夕陽がお気に入りです。夕陽に蒼井響という名前をつけた張本人。また、蒼姫、水姫という呼び名のほかに姫川海という響に付けてもらった名前があり一般人のフリをするときは姫川海と名乗る。水宮と呼ばれる蒼の巫女姫の神殿からは出ることができない。

紅の巫女姫（紅姫、炎姫） 18歳

同じく姫の位を持つ者。真っ直ぐな巫女姫で、曲がったことが大嫌い。それ故に、蒼の巫女姫、翠の巫女姫とは相容れない。

翠の巫女姫（翠姫、風姫） 17歳

潤が仕えている人物。微笑みを絶やさない。掴み所がない性格であるが、巫女姫としての仕事はちゃんとしている。潤がお気に入り。ほぼは一緒にいる。

橙の巫女姫 (橙姫 雷姫) 14～15歳

普段は穏やかだが、言うときはびしっと言う性格をしている。紅の巫女姫よりは蒼の巫女姫、翠の巫女姫との関係も良好(中立的な立場)。紅の巫女姫と特別に仲が良いという訳ではない。また、鳶の巫女姫は大の仲良しで実は姉妹(立場の事情でどちらが姉か妹かは公開されていない)で見分けが付かない。

鳶の巫女姫 (鳶姫 土姫) 14～15歳

穏やかな性格で五姫ではフォロワーやサポートをする立場にある(橙の巫女姫と同じように中立)。芯が強く、まとめるときはしっかりまとめる。橙の巫女姫とは姉妹でどちらが姉、妹であるかは公開されていない(橙の巫女姫のところで説明済み)。

蒼の巫女姫の守護者 天宮夕陽(紹介済み)

翠の巫女姫の守護者 杉宮 潤(紹介済み)

紅の巫女姫の守護者 観並 紅葉：魔法師 16歳

紅の巫女姫と守護者以外とは滅多に話さない。同い年の夕陽、潤とジャックには自分から話しかけるが、ロバートには話しかけない。

また意外と気が強く、紅の巫女姫を馬鹿にされたときはすごい勢いで反論する。

橙の巫女姫の守護者 ジャック・スフェイド：魔法師 38歳

無口（口下手）だが、とても心優しくいざという時に頼りになる。また、橙の巫女姫はもちろんのことだが他の巫女姫 夕陽 潤 紅葉のことをとても大切に思っている。心配性だが、3人の「力」は強いと思っっているため、そういう意味では心配していない（ロバートのことは最初から心配していない。理由はするだけ無駄だから）。戦闘時は冷酷で非情になる（基本的に敵にだけ）。

鳶の巫女姫の守護者 ロバート・レオニン：魔法師 27歳

軽薄で不真面目。趣味は女を口説くというどうしようもない人だが腕は確か。鳶の巫女姫のことは守護する対象だが、それほど大切に思っっているようには見えない（本当はすごく大切に思っっており、鳶の巫女姫からも信頼されている）。

スコア・・・反五姫組織。目的不明の集団。

松本 美咲：魔法師 16歳

元、>蒼流く所属の魔法師。高レベルの水と風 火属性の魔法師。

主に火属性を使用する。夕陽と居る為に>蒼流<に所属していたが、実際は>紅蓮<に所属するはずだった。蒼姫が『約束』を破った為、>蒼流<を抜けスコアに所属した。

ベスレ・ジオルマン：魔法師 32歳

美咲のストッパー役。温和な性格をしている。ただし、戦闘になると無慈悲になる。水と土の魔術師。

ボス：魔法師 不明

本名不明の5属性全て使える天才魔法師。同じく5属性使える魔法師の夕陽に興味を抱き、捕まえようとしている。

ファミール・アプリッコト：魔法師 15歳

美咲と同じ年の男子。有名な火の魔法師。面倒なことが嫌い。

学園潜入

ここは魔法の世界、ガレントラント。

魔法が発見されて3百の月日が経った。この世界には大陸が1つしかなく5つの国が存在している。まず、西に位置するランスレイ王国、東に位置するシルクウェイ共和国、北に位置するハルストライム帝国、南に位置するスガルトール王国、そして、中央に位置するアズレヴィス公国の5つである。

この物語の中心になるのは西の王国、ランスレイ王国である。

ある夜、2人の少年は組織の総帥に呼び出されていた。

その組織を陽影ようえいと言い、総帥の名前をフェルー・ジャックハイルと言いう。

陽影ようえいとは、犯罪組織では無く公にされていないが国の機関である。

「さて、お前達2人を呼んだのは他でもない任務を与えるためだとフェルーはおもむろに口を開いた。

「その任務とは一体何でしょうか？」

「うむ、>蒼流そうりゅう<所属の氷水ひみずい、同じく>神風かみかぜ<所属の風気ふうき。今日からお主ら両名に第3魔法学院に入学を命じる。分かっているとは思うが、これは極秘事項だ。また、情報漏洩を防ぐため自分の隠蔽及びリミッターをしてもらう。なお、風気ふうきはSクラス、氷水ひみずいはAクラスじゃっ!!!」

「何故、自分達を選んだか理由をお聞かせ願えますか？」と風気ふうきと呼ばれた少年が尋ねると「それはだな、お主らはまだ15歳であるう？学校へ行って青春を謳歌させるためじゃっ!!!」と堂々と言

ったのである。

当然2人の反応は「「は？」」である。

そして、氷水ひすいと呼ばれた少年が「そんな下らない理由で俺達を呼び出した訳ではないですよね？総帥……そんな訳無いですよね？」と言いつつ少年は魔力を手に凝縮させながら言った。

「ま、まあおう……強いて言うならば……お前達ならば襲撃事件の真相の究明と犯人の拘束をできると思ってのう……腕も確かであるし、任務をしつかり遂行できるじゃろうと思つてのうということじゃ」と弱々しく言った。

「襲撃事件と言うと……例のアレですか？」と氷水はさつきとは打って変わった真剣な表情で言った。

「そうじゃ。第3魔法学院の襲撃事件で生徒が負傷したそうでの。第3魔法学院には敬家けいけの方も居るのでと言う理由で陽光ようこうからの派遣要請があつての。あとは、青の姫君の未来視みきみで今後も襲撃が起こるとおっしゃられたので」とフェルーが言った。

説明しよう、陽光とは陽影の光あかりの機関であり、陽影はその暗部である。主に、暗殺や諜報活動などの公にできないような案件を請け負つている機関である。陽影の存在は一般には公開されておらず、構成員などの情報も秘匿されている。そのため、陽影の人間は所属時にコードネームを与えられており仲間の間でもコードネームしか知らされていない。ちなみに、>蒼流あせう<、>神風かみかぜ<、>紅蓮くうれん<、>雷光らいこう<、>地天じてん< の5つが存在する。この5つは表ではこの世界で最も神聖視されている巫女姫の守護を担当する巫女姫直屬部隊として活動している。

ちなみに2人はそれぞれの部署の副隊長をしている。

さて、説明はこのくらいにして

「まあ、氷水は行けば良いことが待っているかもの」と総帥が言った。

「良いこと？」

「行けば分かるじやろつて。さて、では頼んだぞ」と総帥が手を振った。意味は、もう用は無い出て行けということだ。

2人はため息をついて部屋から出て行った。

「で、どうする潤じゅん。もう寝る時間はないぞ」と先ほど氷水と呼ばれていた少年、天宮あまみや 夕陽ゆっひは尋ねた。

「そうだね、とりあえず今日かららしいから準備しようか」と風気・
……杉宮すぎみや 潤じゅんは答えた。

彼らは、3時まで任務をこなし、3時30分に帰って来た直後に呼び出されたため寝ていないのである。成長期の2人にとってこれは痛手「まあ、慣れてるから別に良いけどさ」……では無かったようだ。

この任務が彼らの運命を変えることになるのかどうかは不明だが、
任務は開始された。

さて、彼らのこれからはどうなっていくのだろうか

挨拶

ところ変わって、第3魔法術学院。

学園の門の前で「ここ、か……想像以上にデカいな」と夕陽は呟いた。

「そうだね。なんか、支部ぐらいの大きさはあるよね」と潤が返した。

そう、第3魔法術学院は無駄にデカいのだ。生徒は、1学年600人で7年生なので生徒総数は4200人。ちなみに国立なので、学費が安いこともあってか毎年8000人ぐらいが受験する。そして、貴族階級の生徒が多いことも特徴だろう。貴族が多い理由は貴族推薦（通称貴族枠、貴族受験）で2/3は入学することと、一般受験の枠が1/3しか無いからだ。学科は普通科と魔法、魔術科（通称魔法科）の2つ。

夕陽と潤が入るのは魔法科である。

事務室

「すみません、蒼井あおい 響ひびきと杉宮すぎみや 潤じゅんと言う者ですが職員室はどこですか？」と聞いた。広すぎる学院内で事務室が見つかったのは奇跡だろう。

事務の受付に居た人は「蒼井様と杉宮様ですね？少々お待ち下さい」と事務員さんが言い、待つこと5分。角からメガネをかけた女性が走って来た。多分教師だろう。その女性は「お、お待た、せしまし、た……4年生A組担任の、篠原しのはら 小冬こふゆです」と息を切らし

ながら言ってきた。自己紹介をされたので、こちらも「あ、蒼井です。こっちは杉宮」と自己紹介しておく。すると「よろしくね」と微笑みながら言ってきた。「こちらこそ宜しく願います」「と言うと「2人はまだ15歳よね?」と尋ねられたので「そうです」と答える。すると嬉しそうに「じゃあ、蒼井君は私の生徒だねっ!」と言い、今度はちよつと困ったような顔をして「杉宮君は・・・キジ先生だね、頑張つて」と言った。そのキジ先生とやらには何かあるのか?

そんな風に行っていると「取り敢えず、理事長室にいこつか」と案内されるままに理事長室へ行くこととなった。

理事長室

扉が開き「理事長、4年に編入予定の蒼井 響様と杉宮 潤様が来ました」と秘書が言った。

それを聞いた理事長、デュノア・クレルベートは「うむ、通してくれ」と言い、その言葉を聴いた秘書は「承知しました」と扉に掛けた鍵を開錠し、扉を開けると篠原先生と2人の少年が入ってきた。一緒に入ってきた小冬を認めたデュノアは「すまんのだが篠原君・・・」と言いかけた。その後によく言葉を察して「分かりました。終わりましたら2人を教室に案内しますので、お知らせ下さい」と言い、小冬は秘書と共に出て行った。

2人の足音が遠ざかるのを確認すると、夕陽と潤は「お久しぶりです、デュノア様」と氷水と風気としての挨拶した。

そんな2人に「久しぶりですね、2人共。巫女姫はお元気ですか?」と尋ねた。その質問は予想済みだったので「はい、お陰様で」と返事をする。

そんなことを話した後に唐突に「さて、目的は何だね?」とデュノ

アは言つて来た。そんな質問は予想していなかったので『は?』と2人は気の抜けたような声を上げた。再度デュノアは「この学園に編入してきた目的だよ」と問うた。ハつとなり『……襲撃事件の犯人確保です』と言った。するとあっさり「そうかね、なら頼む。あと、蒼井くん……いや、天宮夕陽君」と一部の者しか知らず、一般には死亡した敬家の一族の末裔の名を呼ぶ。その名前を知られているとは知らなかった夕陽は「っ!?!」と言った。そんな夕陽の様子を見たデュノアは「そう驚くことも無いだろう。で、夕陽くんには水の魔法結晶第2階級>アクアマリン<と風の魔法結晶第2階級>エメラルド<を預けてほしい」と言い放った。夕陽の心に冷たいものが落ちていく。恐る恐ると言うように「もし、も……断つたら」と言う。すると「その時はキミの朝陽いもつとさんに君が渡した火の魔法結晶、第1階級>ガーネット<と第2階級>ルビー<をいただごう。元々はキミの者だから私は構わない」と言った。その答えを聞くと険しい顔をしながら「……受け取れよ」と放り投げる。

>ガーネット<と>ルビー<を受け取ったデュノアは「その代わりに君たちの事は私に任せてくれたまえ」と言い、一方的な交渉は成立した。

数時間後

夕陽はここで待つていてと言われ、教室の前で待つていた。その頃、教室の中では「はい、皆さんにお知らせがあります。今日からこの4 Aに新しく編入生が入ることになりました」と言つていた。しばらくすると「蒼井くん、入つて来て」と小冬が言つと教室の扉が開き、1人の少年が入つて来た。

教室に入るなり自己紹介してと小冬に言われ、全く、こつこつ奴ら

は………好奇の目で見てくるなよ、面倒くさい………と
思いながらも「蒼井 響です。宜しく願いします」と短い挨拶を
する。

挨拶を終えると「じゃあ、蒼井くんは塚本くんの隣ね」と言われた
ので塚本とやらの隣に移動する。席の前へ行くと「俺は塚本大地つ
て言っただっ！！よろしくな」と言ってきたので「よろしく」とだ
け言っておいた。

HRが終わると小冬教室から出て行こうとした時が「宿題出したら
1時間目の国語の授業は蒼井くんを質問タイムしても良いからね」
と言った。それを聞いて、おいっ！ちょっと待て、おかしいだろう
！！と思ったが言う前に小冬は教室を出て行き、夕陽は生徒に包囲
された。

結局それから、本当に1時間ぶつ通しで質問攻めにあつた夕陽であ
つた。ちなみに、国語の宿題はその言葉のおかげで提出率100%
だつたとか。

同じ頃、S組では

「杉宮 潤です。最近までアズレヴィス公国に留学してました。分
からないことも多いと思いますが……宜しく願いします」と
潤が同じような挨拶をし、担任のキジ・ユーキャンが「杉宮は最近
まで留学していたそうだ。分からないこともあると思う。フォロー
してやるように」と言いその後、普通に授業が始まったのであつた。

昼休み

昼休みになると「蒼井、中飯食いに行こうぜっ!!」と塚本が言ってきた。「中飯？」と聞いたことが無かったので尋ねると「もしかして、食べないのか？中飯」と言ってきた。真意が伝わらなかったらしかったので「中飯って何？」と再度質問する。すると得心がいったと言う様に「ああ、昼飯のことだよ」と説明してくれた。意味がわかったので「ああ、理解した」と言うとなら、早く行こうぜっ!!」と塚本に連れていかれた先は食堂だった。

「食堂か……」あまり行ったこと無い。理由は不特定多数の人間と食事をするのが嫌だからだ。その呟きを聞き取り「食堂がどうかしたのか？」と塚本が不思議そうに聞いて来た。

だから「いや、購買じゃ無いのかと思って」と言う。正直、塚本は食堂よりも戦い(?)のある購買の方が似合っていると思った。「購買？有るっちゃ有るけど、蒼井って購買派なのか？」と聞いて来た。何と言って良いのかわからなかった。「まあ」と言っておいた。「そういえば先生から聞いたんだけど、蒼井って留学してたんだよな？」と唐突に尋ねて来たので「まあ。一応は」と答える。潤と共に任務で2年ほど留学していたのである。「どんなところなんだ？」と聞かれたが、仕事でほとんど学校へ通っていないだったので「え？あ……俺、あんまり学校行けてなくてよく知らないんだ」と正直に言った。「何で？」と聞いて来た。まあ、誰でも不思議に思うだろう。「家庭の事情」と言っておいた。すると、何を感じたのかは知らないが「そうか。誰にも言わないぜっ!!」と言われた。続け様に「にしても、留学して……どっからそんな金がでるんだよ」と聞かれた。調べればすぐにバレるのでこれまた仕方なく「国から」と言う。任務だが表向きは国からの留学生と言うことになっっていたからだ。「へー、国からね……っつて、国からっ!？」と途中で驚き聞き返される。だから「ああ、出してもらった。勉

強は得意だから」と言い訳(?)をしておく。「それは得意つてレベルかつ!？」と凄まじい勢いで迫つて来た。正直、これ以上は勘弁してほしい。そう思っていると「そこに居るの響？」と声がしたので呼ばれた方へ振り返ると潤ともう1人の少女　紅の巫女姫の守護者、観並紅葉みなみくればがいた。「潤・・・に、紅葉くれば? 何で紅葉がここに居るんだ？」と不思議に思つて尋ねると「私、ここの学生」と紅葉言つた。1人納得していると横から「あ、蒼井つて観並みなみさんと知り合いなのか?!？」と大地バカが言つて来た。鬱陶しい奴だなと思いつつも「は？」と聞くと「観並さんはSクラスの首席なんだ。しかも美少女で学院のアイドル的存在でファンがいるほど有名なんだぞっ」と興奮したように言つて来た。もう諦めて「・・・あ、そう」と言うしか無かつた。

塚本の説明はそれから30分続いた。

その間に昼休みも終わり、お陰で昼を食べ損ねてしまった。まあ、毎日2食だから構わないのだけれど。

「ごめん」と塚本が謝つて来た。「別に、食べなくても平気だから」と言つと「でもさ」「ぐーぎゅるぎゅるぎゅー」「と塚本の腹から音がした。短い沈黙が落ち「・・・これ、食べるか？」と潤からもらったパンを渡すと「良いのか!？」と目を輝かせて言つて来た。「あ、ああ」と返すと「ありがとなっ!!」と言い、食べ始めた。塚本が食べているのを見てると「蒼井くん、ごめんね・・・」と女子生徒が声を掛けて来た。名前は確か・・・三嶋千夏みしまちなつだつたっけ?と思いつつ「別に構わない。どうせ食べないから」と言つと「ホントにごめんっ!!そこに居る大地バカは私の幼馴染なの・・・仲良くしてやってね」と言つて来たので「こちらこそ宜しく」と返しておいた。

そして、パンを食べ終わったのか「そういえば、今日S組にも転入生が入つたらしいぞ」と塚本が言つて来た。それは多分、潤のこと

だろーと思った夕陽であった。

からなかったが「………ちよつと考えてみる」とだけ言
つておく。考える気なんて全く無いが。なんか、こいつの前だと調
子狂うな。こんなキャラにするはずじゃ無かったのに……と考
えていると、部屋のインターホンが鳴り、塚本が慣れた手付きで「
はいはい」と出て行った。

何気なく見ると、三嶋と2人の少女がいた。どこかで見たような顔
だなど思っていると、ふと妹の朝陽ちゃんの顔と少女1人の顔が重
なった。あ、朝陽ちゃん!? 何でここにいるんだ!? と内心軽いパ
ニックに陥った。そんな俺に気付いた様子も無く、朝陽ちゃんは塚
本たちと話していた。そして、塚本がこちらに振り返り「おーいっ
! 蒼井も来いよ」と言われたが、頭に入つて来ない。自分でも混
乱してる事は分かつてるんだけど……とか考えていると、塚本
が目の前に居た。驚きで声が出ず「っ! ?」となつていると「おい、
聞いているか?」と言つて来た。「え、あ、ご、ごめん。……何
?」と尋ねると「だから今から飯食いに行こうつて言つてただけ
ど、蒼井も来ないか?」と言つて来た。「……邪魔にならな
いか」と聞くと「大丈夫大丈夫!!! ……あ、でもちよつと
……緊張するかもだけど。敬家の子が2人居るから」と言つて来
た。朝陽は自分の元々の苗字が天宮だとは知らないし、三嶋や塚本
が敬家の人間の苗字では無いので「敬家の子が2人?」と疑問に思
い言つと「そこに居るのは桜院おういんと園宮そのみやのご令嬢だ」と桜院さん(?)
と朝陽ちゃんを指す。ああ、天宮じゃなくて園宮か。良かった。「
そうなのか。やっぱり俺は止め「行こうよ」「と断ろうとし言葉は
途中で遮られ、朝陽ちゃんに言われた。

「んじゃ、決まりだなっ!! あ、蒼井も誰か誘つて良いぞ!!」と
塚本が言い出し、結局行くことになったのだ。朝陽ちゃんに関わら
ないようにしないか思いつつも久しぶりに会えて嬉しかった。

そして、誰かを誘つても良いと言われたので潤と紅葉を誘つた俺だ
った。

待ち合わせ場所には先に潤と紅葉が来ていた。紅葉の姿を見るなり「なっ!?! なななな何でええっ!?! こ、ここに観みな並さんが!?!」と奇妙な声(?)を出したのは塚本改め、大地だ。本人が大地と呼べとしつこいのでこうなった。

「響に誘われたから」と紅葉が言い「そ、そそそそうなんですかと大地が返した。すごいテンパってる。「ところで、そっちの子は?」と三嶋が潤を指して言った。「あ、今日付けで? Sクラスに転入した杉宮 潤すきみや ぬんと言います」と潤が軽く自己紹介をする。俺は相変わらず、本性を見せない丁寧な言い回しだとか思ったりする訳で。

俺だって他の人はこんなこと思わないぞ。潤に対してだけだ。何故なら、こいつは・・・本性が出た時が超怖い。昔は・・・ああ、思い出しただけで嫌になる。

「じゃあ、杉宮くん? も転入生なのね。もしかして、一緒に留学してたとか?」と三嶋が聞いて来た。さて、潤はどう答えるんだろうか。「はい、僕は響と同じ学校に通ってましたよ。一応は」と返した。

「一応?」と不思議そうに聞いて来る。

「はい、響はあまり学校に来なかつたので」と意地悪い笑みでこっちを見ている。や、やりやがったなっ!?! ここで言えっか? 冗談じゃない。

「ま・さ・か、不登校なんて訳ないわよね?」と怒ったように言うて来た。

「不登校では無い」とだけ言うておく。

「じゃあ、何で学校に行つてないのよ?」と当たり前だが聞かれた。

「・・・・・・・・答えたくない」

「家庭の事情なんだっ!?! 答えたくないって言うてんだから言わせやるなよっ!?!」と言った。

「大地・・・・・・・・それは言わないって約束・・・・・・・・」
「あ」

『我が眷属よ氷結せよ』と夕陽は詠唱した。
すると「?・・・・うわああああああっ!!」と大地は叫び氷
漬けになった。

それを見た潤は「あーあ、一般人を氷漬けにしちゃった」と眩き、
「ちょ、ちよつと、蒼井くん!？」と三嶋は焦ったように言った。
そりゃそうだろう、幼馴染が氷漬けになっているのだから。

呼ばれた夕陽は「・・・・・・・・」と無言で氷の中に閉じ込められて
いる大地を睨んでいたのだった。

侵入者（前書き）

長らく、お待たせいたしました。実にすみません

侵入者

氷を溶かしてから……

「うおーっ！！寒かったああああ」と大地が出て来た。
生きて出れたことに喜びを感じているらしい。

早くこの空気に気付いてくれ。こっちは寒いんだよね……
と僕が思っていると「みんな、何でそんな顔してるんだ？」と能天
気に塚本君が言ってきた。

「大地、俺言つたよな？」と鋭く冷たい声が背後から飛んで来た。

「……うん」

「じゃあ、何で言つたんだ？」

「……空気読んだから」

「……死んでくれるよね？」と再び死刑
宣告がされた。

この後起こったことは言うまい。

僕の命を保障するた……訂正、ユウの名誉の為に。

その夜

「そろそろ行こうか、氷水」と風気こと潤が言った。

そう、今日は密売組織を抹殺する日だ。

「そうだな」と返事をし、準備する。

準備といってもただ裏蒼流くの制服に着替えて上に黒のコート羽
織りリミッターを解除するだけだ。

薬物密売組織、ラマリー本部

「おい、あきや暁夜。今日入った金はいくらだ？」とラマリーの幹部である日引野塚輔ひつひのしゅうすけが言った。

「96万3867円です」

「おい、671万5426円足りねえじゃねえかつ」と酒瓶を投げて来た。

だが、それはあきや暁夜ことたかはしあきや高橋暁夜に当たる前に不可視の壁にぶつかり砕け散った。

「飲むのは構いませんが、飲みすぎると体に毒ですよ」とだけ言うておく。

どうせ、聞かないんだろうが。いつものことだ。毎日毎日、飲んで文句を言い酒瓶を投げつけて来る。進歩が無いというか、学習しないというのか……。

そもそも、俺がこんな人間に仕えているのは妹が人質に取られているからだ。

親の借金により親が殺され、妹を人質に取られて働かされる。いい加減にしてほしい。

しかし、そんな日々から開放されることになるうとはこの時はまだ知らなかった。

突如、侵入者が現れた。

窓ガラスが割れ「はあーいつ 元気ですかー!!! スコアの爆風の女神こと松本美咲ちゃんです」と少女が進入してきた。

周りの反応はというと、ぽかーんと言う感じだった。

「し、侵入者ー!?」という声があった。

「スコアの間人だつて言つたでしょ?」と美咲という少女が言った。そう、スコアとラマリーは協力関係にあつた。

あくまで、過去形だ。

「スコアの方が何の用かな?」と日引野壕輔ひききの じゅうすけが聞いた。

「落とし前を着けに来たの。貴方達、契約違反したでしょ?」と何事もないような口調で言つた。

「契約違反?何のことかな、お嬢ちゃん」

「クスリよ。一般市民にまでバラ撒いたでしょ?」とはつきりと告げた。

実際にラマリーはスコアとの契約の1つである、一般人にクスリをバラ撒かないということを違反した。

だから、美咲が来たのである。

「そんなことはしていないが?」

「あら、私達スコアが証拠も無くこんなことすると思う?あと、お嬢ちゃんつて呼ぶのはやめて」と美咲は言つた。

「ならば証拠とやらを見せてもらおうか」と日引野が言つた。彼は証拠を持つて来ていないと思つたから言つたのだが。

「はあ、認めてよねー」ち美咲はめんどくさそうに言い「これで満足?」と写真と一枚のディスクを取り出した。そして写真をばら撒き、ディスクを再生する。

「これがほしいか?ほしいのならば、働け。何、簡単なことだ。写真のこいつを殺せば良い。それだけでお前のほしいものが手に入るんだぞ?やれるな……」と音声が流れる。

「なっ!?ぬう!?」と言つた。

「んじゃ、分かつてくれたわよね?という訳で、制裁タイムっ!!!」『燃えつくせ』と美咲が言い、魔法を放つ。

すると情けなくも、高橋に向かつて「高橋っ!!!」と助けを求め

た。

「アホよね」と美咲は呟き「たーかはーしさんっ」と明るく呼びかける。

「……………な、何ですか」と氷の障壁を作りつつ言った。既に額に汗が浮かんでいる。

「知ってるーっ？君の妹のアスカちゃんがどうしてるか」と言い、高橋の返事を待つ。いきなり話を振られた暁夜あきやは「はっ!？」と素っ頓狂な声を出した。

「あー、やっぱり知らないんだ」「黙れっ!!この女がっ!!」「と美咲の言葉を遮り、日引野が叫んだ。

「あの…………日引野様?」

「さっさと殺すのだ!!その小娘を!!!!」

「何をそんなに焦っているの?貴方がしたことでしょう?アスカちゃんを殺そうとした癖に高橋さんを使おうとするなんて」とハツキリと告げた。

対峙と決断

「殺そうとした……？」と暁夜は呆然と呟いた。

「そう。日引野は貴方の妹のアスカちゃんを殺そうとしたのよ」と美咲ははつきりと告げた。

「どういうことですか、日引野様」と困惑したように暁夜は振り返った。すると「その女が言っていることは嘘だっ！！騙されるな」と焦った様に日引野が言い返すが、こんな状態ではフォローになっていない。墓穴を掘っただけだ。

「殺したのか？アスカを……俺のたった一人の家族を！！！！！」と暁夜は激昂した。そして日引野に向けて『疾風』を放った。しかし、それは日引野に当たる前に消滅する。以前、暁夜自身が製作した風の護り石『常盤』によつて。

「あ、待つて待つて、高橋さん！！確かに襲われたけど、アスカちゃんは無事よ！」と美咲が叫んだ。

それによつて多少は落ち着いたのかは分からないが、困惑したように「は？」と暁夜は言った。

「私達はそんなに無情じゃないわよ？全く……保護したに決まつてるじゃないの。心配しなくても後で会わせてあげるわよ。取り敢えず、無事だつて証明してあげるわ。理緒」と何も無い空間に向かつて呼びかける。

すると【あー、美咲ちゃん？】とフォログラフィーが投影された。

「アスカちゃんの無事を証明してたいんだけど」と美咲が言うところだった。ちよつと待つててね、アスカちゃん、ちよつとこつち来て」とどこかに向かつて呼びかけた。すると【なあにー？】とのほほんとした声が聞こえて少女のフォログラフィーが投影される。

「アスカ……なの、か？」と暁夜が言う。すると少女の顔がぱあつと輝き【お兄ちゃんっ！！今、お姉ちゃんと遊んでるのっ

】と笑顔で言う。その笑顔を見た瞬間、安堵とまだ少し警戒が入

り混じった顔で「そうか」と言った。
そんな暁夜に向かつて美咲は「これで、信用してくれた？私の言っていること」と言った。それに対して暁夜は振り返り「ああ、感謝する」と返す。

進入に成功した夕陽と潤は

「さてと、行くか」と部屋の前で銃を装填していた。そして、バツと部屋に侵入した。侵入すると同時に夕陽は銃を撃つ。その弾丸は日引野の心臓に直撃、貫通した。あっけなく日引野は死亡した。確認するまでも無い、即死だ。そして次々とラマリーの残りの面々も殲滅していく。

ほとんどの人間が呆然とする中で当たり前のように「ユウ、に潤じゃない。早かったわね」と美咲が言った。美咲の姿を確認した夕陽は銃を向けつつ「やはりお前も居たのか美咲」と言った。

「うん、私達スコアの用件だね。まあ、ユウが片付けちゃったけど」と肩をすくめた。

「取り敢えず、今回の俺たちの任務は2つだ。ラマリーの殲滅・・・これは完遂した。もう1つは高橋兄妹の保護だ。だから今回は見逃してやる。早く消えろ、美咲」と夕陽は言った。

その言葉を聴いても美咲は立ち去ろうとはしなかった。今までは立ち去ったのに。

「それはできないわ。今回は私達スコアの目的も月影そっちと同じなのよ」と言った。それを聞いた夕陽は目を見張り「お前たちの目的は妹の方か？」と聞いた。それを聞いて「何勘違いしてるのか知らないけど目的なんか無いわよ、今回は」と美咲は今回を強調した。

仕方なく夕陽は「なら、魔術まじゅつ戦闘か」と魔力を纏わせた腕を突き出す。そんな姿を見た美咲は「そんな物騒なことしようとしてる人を

信用できるはず無いわよ？」と呆れたように言う。「……そう
かもしれないけど、そうじゃないかもしれない。受け取り方は高橋
暁夜に任せる」と夕陽は暁夜を見ながら言う。

夕陽に見つめられた暁夜は内心困惑していた。何故なら一見、夕陽
の眼は何の感情も伺え無いが、何処か優しい印象も受けるからだ。

悩みに悩んだ結果、暁夜が選んだのは 「俺は……」
スコアに付きます」と言った。陽影は確かに国の機関である。しか
し、どんな機関かわからない以上安心できるとは言えない。また妹
を人質に取られる可能性がスコアにはあったが、助けてもらった恩
とそれなりに長い付き合いがある。

その返答を聞いた夕陽は「残念だ。だが、スコアに付く以上それな
りの覚悟があるのだろ。そこは評価する。しかし、俺は『敵』に
は容赦しない。例え、過去に仲の良かったものである」と言っ
た。

月夜の戦い（前書き）

はい、遅くなつてすみません。この2ヶ月ほど自分の周りにある小説を片っ端から読んで勉強したつもりです。依然と全く変わっていないかもしれませんが。これからも、よろしく願います。

月夜の戦い

暁夜の返答を聞いてから夕陽は躊躇わずに攻撃魔法を放った。それを間一髪で避けた暁夜は自身の使える最高位の障壁魔法を張ったが、それは夕陽の魔法を2回防いだけで消えた。暁夜は自分の使える最高位の障壁魔法が脆くも崩れ去ったのに一瞬呆然としたが、すぐに我に変えると『木枯』こがらしを放つ。しかし、『木枯』は難なく防がれた。更に魔法攻撃は止まない。焦り始めた暁夜は冷静に物事を見られていなかった。そんな暁夜に向かって「高橋さん、『転移』の準備しといてもらえるかな？その間は私が抑えるから」と美咲が声を掛けた。「分かりました」と暁夜は了承し、すぐに『転移』の準備に入った。暁夜が『転移』の準備に入ったのを見て美咲は注意を引くために『火炎』『フレア』を放った。陽動であると分かっているも美咲の魔法は片手間に相手できるものではない。やむを得ず、暁夜への攻撃を中断し『シールド』を展開する。『シールド』を展開しつつ潤に向かって「風、足止め」と言った。それを聞いた潤は「ええー、僕は高橋さんの魔法と相性悪いんだけど？魔法もあんまり得意じゃないし」と言っていると「馬鹿にしてるのか？さつさとしろ」と冷やかな声が返って来た。「分かったよ、もー」と言いながら『突風』を放つ。潤の放つ『突風』の威力は並みの魔法使いの30倍を軽く超える。早々簡単には防げない。しかし、暁夜は『守護障壁』を何重にも張り巡らせ更に魔法結晶『守り手』を使いこれを防いだ。その間に『転移』を完成させて美咲に向かって「行きますよっ！」「転移：座標ポイント：自動：発動」と詠唱し消えた。「ちっ！逃げられたか……」と夕陽は日引野壕ひひきのぼり輔すけだった(……)モノを蹴り上げる。それを見た潤は「蹴らなくても。生きている時の罪は死ねば消えるんだから」と言った。「そんな簡単に罪が消えてたまるか」と言いながらも夕陽は蹴るのを止めた。「そろそろ学園に帰ろ」と潤が言い、二人は『転移』を使いそこから消えた。ちなみ

に2人が消えた数分後に陽影の『処理班』と『情報部』、『隠蔽班』が来て『片付け』をしたのであった。

学園の寮に戻った2人は

「報告書、書かないとだよな……あの2人について」と潤が言い「飯、1回奢るから任せて良い？」と夕陽が言い「わかったっ！ー！じゃあ……ピザと点心が食べたいなっ」と潤が笑顔で言うところ「了解、そっちは任せる」と言い、夕陽は潤の部屋を出て行った。

夕陽が出て行った後 「さて、じゃあやりますか」と言い報告書に取り掛かった。ちなみに潤は1人部屋だ。塚本がいつ帰ってくるかわからないので夕陽は潤に報告書を頼んだのだ。

部屋に入ると塚本が「お帰りー。どこに行ってたんだ？」と聞いて来たので「ちよつと用事があった」と誤魔化した。嘘は言っていない。だって、本当に任務よじだったのだから。「ところで晩飯どうするんだ？俺は作れないから食堂行くんだけど」と言われたので「あ……自分で作る。塚本も一緒に食べる？」と聞くと「マジで！？食べる食べるっ」と言ってきた。ちなみに、この学園は寮の各部屋にキッチンが付いている。自炊派の俺にとっては有難いことだ。メニューは塚本のリクエストであるオムライスだ。塚本は「おお、すごい」と隣でほけつと見ているだけだ。動き回ると流石に邪魔になるので「その棚から皿3枚取ってくれる？」と言うとすぐに持って来てくれた。そこで疑問に思ったのか「何で3枚もいるんだ？」

と聞いて来たので「潤の分。報告書レポートしてるから晩飯作る時間無いと思っし」と言っておく。「そうか」と納得したように言っ来て来た。そうこうしているうちにオムライスが出来上がった。

机に持って行き「先に食べてて」とだけ告げると夕陽はオムライスを隣の潤の部屋へ持って行く。部屋に入ると「何？どうしたの？」と潤が聞いて来たので「晩飯持って来た」とオムライスを差し出す。すると「ありがと。あ、報告書書けたから、後で目を通してくれる？」と言っ来てたので「わかった。後でまた来る」と告げて部屋を出る。

ちなみにこの学園は全てカードキーと腕輪型の登録端末でもどこでも行き来できるのだ。まあ、他人の部屋に入るのは相手の許可が必要なのだが。

部屋に戻ると「一緒に食べようぜ」と塚本が言っ来て来た。「先に食べとけっ言ったのに」と言っくと「一緒に食ったほうが美味しいじゃん」と言われた。「冷めるじゃないか」と言いながらも嬉しそうな夕陽。食べ始めると「おお、うまっ」と大地が言い、学校のことについていろいろ教えてもらいながら食事をしたのであった。食べ終わると大地が「作ってもらっただから、片付けは俺がするよ」と言っ来てたので潤の部屋に行くことにした。

部屋に入ると「そこに置いてあるからちよつと見てくれる？」とパソコンが置いてある机を指してオムライスを食べ始める。しばらくそれを食い入るように見ていた夕陽は「良いんじゃないか？」と言いながらその紙を脇に置いて陽影の腕輪型端末を取り出して操作し始める。しばらくすると探していた情報が見つかったのか指を止めてしばらく眺めた後「っ！？潤、明日の集会の見た？」と尋ねた。すると「え？何か新しい情報来てた？」と潤も聞き返しながら端末

を取り出す。そしてそれを見た瞬間「え!？」と驚きの声を上げる。そこに書かれていたのは《明日の集会は最高会に変更》と書かれていた。集会は守護者のみ。巫女姫、監査委員、守護者 通称、参位さんいが揃うと最高会となる。「何でいきなり最高会になるの?」と潤が聞いて来たが「俺だって知らない」と言つた時に突然端末に紅葉からメールが入った。見てみると《明日のことで相談があるからカフェテリアに来てくれない?》というものだった。《わかった》と返信し席を立ち潤と部屋を出る。

カフェテリアに行くと紅葉が既に来ていた。俺たちが席につくなり「何でいきなり最高会に変わってるの?」と聞いて来た。「さあ?」と言つと「全く・・・もうちょっと真面目に答えてよ」と言われた。「明日なれば分かる」と言いそれからしばらく話をした後別れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0535s/>

『太陽』

2011年11月12日15時05分発行